

審査結果の要旨

氏名 犬塚 美輪

本論文は、中学生・高校生にとって重要な課題である説明文読解を促進するための知見を得ることを目的としている。第1章では、説明文読解のプロセスについて、認知心理学的諸研究を踏まえつつ考察し、本論文の焦点と課題を示している。説明文読解を、文章から内的表象を構築するためのプロセスとみなし、そのために読み手が用いる方略、すなわち目標志向的でコントロール可能な手続きに注目する。そして、その因子構造を枠組みとして、発達過程の検討と指導法の開発を研究の焦点とすることとしている。

第2章では、説明文読解方略を測定する質問紙を作成し、読解方略の因子構造を見だし、理解補償方略、内容学習方略、理解深化方略のもとに7種類の下位方略を位置づける「3因子モデル」を提唱している。また、発話思考との対応を検討して併存的妥当性を示すとともに、異なる対象者に質問紙を実施して構造の一般性を確認している。第3章では、文章構造の明確性を変化させた上で、読解方略使用の発達を検討した。全体構造が不明確な文章では、学年が上になるほど方略を用いる傾向が強く、要点把握・視覚的工夫・効率性といった方略の質的側面においても学年間の差異が見られた。このように、方略使用は、発達的にみて、維持または増加する傾向にあるが、方略使用頻度が単純に増加するのではなく、課題の特徴に即して適応的な方略使用がなされるようになることが示された。

第4章では、中学生と大学生に質問紙調査と面接調査を実施し、これまで学校の中で、質問生成方略や知識活用方略の指導を受けたと認識していない者が多いこと、要点把握方略、構造注目方略、質問生成方略に関しては、指導を受けたという認識のある読み手のほうが、普段の読解において、より頻繁に方略を使用することが示された。第5章では、方略が明確なルールとして与えられ、その意識的な練習を通して有効性を示す「明示練習」と、読解プロセスに埋め込んで方略使用の実例を示し、その分析を通して方略の機能と有効性を学習させる「分析的学習」とを提案し、実践を通じて比較検討している。指導の結果、いずれの指導法においても、読解成績と方略使用が向上したが、方略の性質によって、指導法の効果が異なることも示された。さらに、次の段階の指導として、メタ認知に着目した指導法である「相互説明」を提案した。これは、文章内容の説明と質問を交代しながら行うもので、指導の結果、より適切に方略を使用できるようになった。第6章では、クラス内の通常の指導では対応しにくい生徒に対する個別指導を取り上げ、こうした学習者に対しては、アセスメントを読解プロセスとの対応から解釈し、指導する方略を精選した上で指導していくことが重要であることを指摘している。最後に、第7章では、読解方略の発達と指導について、本研究で得られた結果をまとめ、その意義と示唆、および今後の課題を述べている。

このように、本論文は、読解プロセスと対応した読解方略構造を、統計的分析から示し、方略の適応的な使用という視点からの発達モデルに基づいた指導法を考案して実証的に検討したものであり、研究上ならびに教育実践上、大きな示唆を与えるものと考えられる。よって、博士（教育学）としての十分な水準に達していると判断された。